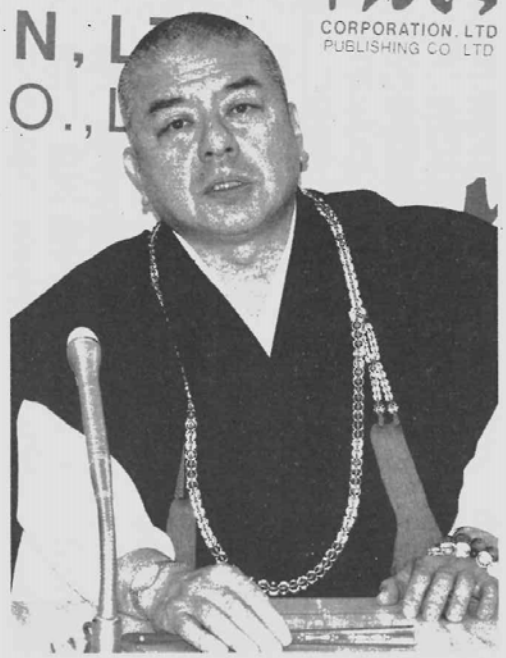
夕刊フジ　2020年12月26日（25日発行）

夕刊フジ　2020年

ニッポン ドクター和の 臨終図巻

⑱⑥ 僧侶・タレント 織田無道

往生際の悪さで明るく生きられた



欲望に忠実だった

「生臭坊主」。この人をテレビで見る度そんな言葉が浮かびました。キャバクラ大好き、肉や酒も大好きと豪語。ランボルギーニの特別仕様車を乗り回す姿に嫌悪感さえ覚えました。仏教を何と思っているのかと。

1990年代、「霊視」「除霊」でバラエティー番組に引っ張りだこだった僧侶でありタレントの織田無道さんが12月9日に亡くなりました。享年68。織田さんは2018年6月、ステージ4の大腸がんと診断され、医師からは「もう何をしても無駄。明日死んでもおかしくない」と匙を投げられたそうです。〈織田無道、全身がんを告白〉という記事をいくつか拝見しましたが、その割には眼は力強く生命力に溢れていました。

「全身がん」という病名は医学的な概念ではありません。全身の各臓器にがんが転移した状態をいつしかメディアがこう呼ぶようになり、18年に亡くなられた樹木希林さんの闘病の際に広まったように思います。高須クリニックの高須克弥院長も2年前に全身がんと発表されています。樹木さんは13カ所、織田さんは20カ箇所以上の転移がありました。全身がんとは裏を返せば、それでも生きられるがんということ。本当にタチの悪いがんなら、その前に命が尽きてしまいます。がんと共存しながら好きなことをやり続けられるのが全身がん。

織田さんは、自分と同じがん患者を励ましたいと1年前にはユーチューバーデビューを果たしました。末期がんになった心境や、死後の世界についても赤裸々に語っていました。時には、大病院の対応に対して、強い批判を述べることも。そこにはもう、バブル的な生臭坊主の面影はありませんでした。

「私は医学的にはとっくに命が終わっています。生きるって皆さん、なんだと思いますか？　我々にはもともと実体などないんです」

「余命半年だ、3カ月だと病院で唸っている方、その辛さは十分にわかります。だけど自分の生命力をもう一度確認してください。私なんか水風呂入ったりしていますよ。気合入れて、とりゃー！　って。はい、バカです。アホです。でもがんと直接向き合って、自分の生命力の方があるのだと信じましょう」

私は「往生際が悪い三職種は医者と坊主と教師だ」とかねてから講演でお話ししてきました。織田さんは往生際が悪かったからこそ、余命宣告よりもずっと長く、最期まで明るく生きられました。欲望に忠実な、チャーミングなお坊さんでしたね。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。